
辞典少女

乃井村つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辞典少女

【Nコード】

N3289P

【作者名】

乃井村つばさ

【あらすじ】

渡辺一は恋をした。
クノ四ツ谷綾子に。

恋愛ゲームの桃花

に似た、辞典オタ

（前書き）

この作品は、連載用に書いたものを短編に編集したものです。
まだまだ紹介しきれない彼らの魅力があります。

皆様のお声次第で、連載も考えるお話です。

気軽にごすぐ読める短編なので、ぜひぜひ、感想をよろしく願います。

僕は彼女を振り向かせる為に、全てをかけた。なのに
「はじめくん、私あなたとは友達でいたいので……だから、ごめんなさい。さよなら」

僕の目の前に、笑顔を消して身を翻そうとしている彼女がいる。

「待って……桃花！」

僕は彼女を呼び止めた。彼女は傷付いた目を僕に向けて、こう言い放った。

「ほんとに、ごめん。はじめくんと話す事なんて、もうないから……！」

B a d E n d

ゲームの画面に出た文字に肩を落とした。

バイトをしてない学生にしては高いお金を出して買ったゲームソフトなのに、ハッピーエンドになるのは難しい恋愛ゲームだ。何度も桃花にアタックしたが、その恋は実る事は無かった。

噂によると、ハッピーエンドになれば彼女とあんな事やこんな事が出来ると言う。叶う事があれば、だが。

「廊下に出席番号順に並んでください」

担任教師と思われる若い女性が、ざわつく教室の中に声を投げた。今日は、僕ら一年生の入学式だ。

僕はゲーム機を学生鞆に入れて、廊下に並ぶ列の一番後ろについた。

ふと視線を下げると、僕より身長が二十センチは低い女の子が、淡い茶色の表紙の辞典を持って僕の前に並んでいる。

僕の視線に気付いた彼女は、僕を見上げて控え目に笑った。

「良かった。私より出席番号が遅い人がいて。四ツ谷綾子です」

なんとというか、夢なんじゃないかと思った。

名前こそ一緒じゃないにしても、彼女の容姿は、あの、桃花が現実に飛び出してきたような優等生萌えする女の子だった。

入学式に行く今さえ辞典を持つてるなんて、電波属性なのか？

僕は急いで笑い返した。

2

入学式なんて退屈なだけだ。そういうとき、僕はもっぱら妄想に漕ぎ出す。いつもは、桃花の事なのだが、今日は隣にいる四ツ谷の事だった。

彼女は時折、辞書をパラパラとめくっては、意味を調べているようだった。

「新生、退場」

気が付くと入学式が終わっていた。

司会の声に、後ろにスタンバイしていた吹奏楽部が、有名な行進曲を演奏し始める。僕の中学の吹奏楽部の方が上手かったと思った。教室に戻ると、隣の席の女子が話しかけてきた。

「あのっ！良かったらアドレス教えてくれませんか」

ああ、と言いながら携帯を取り出す。どういう訳か、現実の女の子には気に入られるらしい。僕がオタクだなんて知らないから、そうやって思えるのだ。そんな彼女はどちらかと言えば巨乳属性になる。残念ながら、僕はもう少し慎ましやかな方が好きだ。

四ツ谷綾子のような。

僕は、ふと彼女に惚れてしまっている事に気付いた。四ツ谷は、僕の前の席で辞典を読んでいる。

「四ツ谷さん」

僕は彼女に声を掛けた。

彼女は顔だけをこちらに向けた。さっきのような笑顔はない。

「渡辺くん。私の事は気にしないでいいですから」

「え、あ……」

四ツ谷は、何事も無かったように前を向いた。どうしたというの
だろう。

「四ツ谷さんだっけ。一人が好きそうな子だね」 巨乳少女が言う。

「気にしない方がいいよ」

「そう、なのかな」

僕は、少し引っかかりながらも、迫り来るアドレス交換の嵐に、
ひたすら笑顔を作った。

3

「四ツ谷さんっ!」

僕は放課後になってから、もう一度彼女に話し掛けた。

「少し、いいかな」

「何?」

「あ、えっと……」

少し焦った。これと言って話がある訳でもない。

「アドレス交換してくれないかな」

彼女は、俯いて声を絞り出した。

「ごめん」

「……嫌、だった?」

僕が恐る恐る聞くと、彼女はぶんぶんと首を振ってもう一度、
「めんなさい、と言った。

「じゃあ、教えておくから、気が向いたら連絡してくればいい」

僕は、買ったばかりの教科書の端を破って、アドレスと番号を書
いた。

「何の辞典を読んでの?」

僕が聞くと、彼女は少し控え目に言い放った。

「……まだ、話しは終わらない？ 少しって言ったよね。数量や程度がわずかなさまですってよ。渡辺くんのは、たくさんって言うんだよ。さよなら」 四ツ谷は慣れた手つきで、少しの意味を国語辞典で引いた。呆気にとられる僕に、彼女は身を翻し、小さくなっていく。

僕は彼女に嫌われている。

そう思わずにはいられないくらい、彼女は冷たい。

それは、あの時の桃花を連想させた。

だけどそれは逆に、彼女を振り向かせたい気持ちになる。男の性だ。

僕は鞆を持って、帰路についた。

4

5月。僕の学校では、校外へ出て、フルマラソン分のウォーキング大会が開催される。

僕ら一年生には、初めての行事だ。

ウォーキング自体には、なんの楽しみもないが、授業が丸々潰れるのだから、皆浮き足立っていた。

だが、開催予定の明日は生憎の雨らしく、明日の朝、連絡網で延期のお知らせが回ってくるだろう。

どうせ僕は出席番号が最後だから回す人もいない。僕に回す奴が誰かは知らないが、中学校は男女別だったから、高校だって男子からメールで来るに違いない。

と思った僕が馬鹿だった。

気が付くと眠りについていて僕が目を覚ましたのは、枕元の携帯が鳴った午前六時十五分過ぎ。外は雨音で賑やかだ。

ディスプレイには知らない番号。

まさかと思い、僕は咳払いをして通話ボタンを押した。

「もしもし」

声が掠れた。もう一度咳払いをして耳を澄ます。

『四ツ谷です。おはよう』

「おはよう」

『今日のウォーキングは中止で、通常授業ですって連絡網』

「……………」

『渡辺……………くん？』

僕は黙っていた。彼女の声は、いつものように冷たさを含んではいなかったから。

『……………ざ、残念だね。おまけに雨で憂鬱な気分。でも、ちゃんと学校来るんだよ、渡辺くん』

彼女は、携帯越しに流れる微妙な空気を読み、わざと明るく言った。

「四ツ谷さん、俺の事嫌いなんだよね」

え、と四ツ谷は言った。

『そんな事、言っていないよ』

「言ってなかったってッ！」

僕は思わず声が大きくなった。

「……………分かるよ。四ツ谷さんは俺を避けてる」

『……………』

彼女は黙った。

「もっとこうやって、普通に話せよ。目そらすなよ」

僕は、それが懇願に聞こえないようにと願って言った。

『無理だよ。だって……………載ってないから』

「え？」

『辞典に…………… な人に好かれるような、言葉』

急に強まった雨音に、彼女の声がかき消された。

僕は通話音量を上げて彼女に言った。

「何？ 聞こえないよ」

そういう僕には、彼女の言いたい事が大体分かった。彼女がツンデレ属性だという事も。

伊達に恋愛ゲームをやっていない。僕の勘は鋭い方だ。

僕は彼女に言った。

「次のウォーキング大会の時、たくさん時間もらいたいんだけど」
彼女は、少し驚いた風に、それでもどこか笑いを含んだ声で答えた。

「分かった」

5

翌週に持ち越されたウォーキング大会は、快晴の中行われた。

全校生徒八百人余りがゾロゾロ連れ立って歩くのだから、すれ違う人が怪訝な顔をするのも分かる。僕だって少し恥ずかしい。

四ツ谷は一番後ろで一人で歩いている。

僕は一緒に歩いていた悪友に謝って、四ツ谷の所に行った。ヒューヒューと口笛が聞こえたから僕は、そいつらに中指を立てた。

「何読んでるの？」

僕の声に四ツ谷は顔を上げた。

「知ってる？ この池には河童が出るんだよ」

驚いて彼女の開いているページを覗き込むと、古い河童の絵と小さな文字で説明がちらちらと書いてある。

「何、それ」

驚いて聞くと、彼女は表紙を見せた。

「新・妖怪大辞典」

僕は思わず吹き出した。

「何か可笑的い？」

怪訝そうに聞き返す彼女に、僕は首を振った。

「可笑しくなんかない」

「渡辺くん、笑ったじゃない」「違うよ……可愛いなあと思って」
僕はそう言って後悔した。

彼女が酷く顔を赤くしたからだ。

おまけに、いつの間にか前で聞き耳を立てていた悪友たちが、はやし立てたのだから始末が悪い。

「渡辺！ お前もやるときはやるなあ。付き合ってるのか」

そういう彼らに、ますます四ツ谷は赤くなる。

僕は彼女が否定する前に、言った。

「そつだよ。付き合ってる」

「え……わ、渡辺くん！」

四ツ谷の消え入りそうな声に、僕は彼女を抱きすくめたい衝動に駆られた。

そんな時、あろうことか悪友共がキスを要求してきた。校外に出て、多少興奮していたのだろう。

「ちよつと！ やめて、違うんだってば……っ！ 渡辺くんも、何か言ってるよ」

「んー。愛してる、とか？」

わざと聞こえるように言った。

言葉を失う彼女を引き寄せて、唇が当たるか当たらないかくらいの柔らかいキスをした。

高校生は、それだけでも十分興奮するものだ。あたりから歓声が上がった。

6

「知らなかった。渡辺くんってサディスティックなんだ」

顔の火照りと野次が収まってから、彼女が言った。

僕は、自分でも驚く程落ち着いてしまっていた。恋愛経験が無くはないけれど、公開告白だけは冗談ではない、と思っていたのだから、恋の力は偉大だ。

「四ツ谷さんが、そんなに赤くなるからいけないんだ」

彼女は、先ほどの事を思い出したのか、少しだけ赤くなった。

「接吻……」彼女は言った。「思っていたものよりも、簡単なんだね」

え、と驚いた僕に言う。

「もっと、複雑な手続きがあるかと思ったの」

僕は可笑しくなった。

彼女は、辞典に載っている事はなんでも知っているのに、恋愛の方はさっぱりなのだ。

「もっと、複雑な…… 上級者向けをあげようか」

僕は彼女の手を引っ張って、前の人との距離をたっぷり取った。やがて、彼らの背中が小さくなってから、土手を降りた。

「私、渡辺くんに会った時、夢なんじゃないかと思った。だって、いつかの夢で見た人にそっくりだったから」

彼女は言った。

「嫌われたく、なかったの。拒絶されたくなかった。夢だとしても、離れたくなかった」

彼女は、いつかの態度をそう語った。

僕なんかよりも、遥かに運命的なものを感じていたのだ、彼女は。

僕は彼女の顎を捉えた。

大好き、って囁きながら。

Happy End

(後書き)

読んで下さり、ありがとうございます。
感想、評価等お待ちしております。

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3289p/>

辞典少女

2010年12月5日20時48分発行